

An informational overview on in-vitro allergy testing

第 6 回 世界獣医皮膚科学会議 (WCVD6)

大会長：岩崎 利郎 教授 / 東京農工大学 会期：2008 年 11 月 19 日～ 22 日 開催地：香港

上記学会に参加して得たアレルギー性皮膚疾患に関する最新情報を TOPICS としてお届けします。

①減感作療法 (アレルゲン特異的免疫療法：ASIT) はアトピー性皮膚炎治療の欧米スタンダード

アトピー性皮膚炎 (AD) に対する新しい治療が紹介される中でも、ASIT は依然として最終的に抗炎症治療の必要なく、症状を部分もしくは完全寛解に導くことができる唯一の治療法として認識されています。複数の講演とワークショップの中で、急速減感作療法の紹介やそれぞれ異なるプロトコルが紹介されました。使用抗原の種類や、投与量は未だ標準化されていませんが、治療成功率には各参加者が相応の感触を持っているようでした。

②フレンチブルドックに多いアトピー様皮膚疾患 (ALD) の存在 (Pleraud P. ら、Vet Dermatol 2007;18;385)

Dr.Thierry Olivry：論争中の犬アレルギー最新情報の講演中、ステロイドと抗生物質に反応が鈍く、シクロスポリンも効き難いアトピー様皮膚疾患 (Atopic-Like Dermatitis：ALD) はフレンチブルドックに多いという報告が紹介されました。

③オーラル (口腔) アレルギー症候群の認識

アトピー性皮膚炎とフードアレルギーのワークショップ中、花粉等の環境抗原と、果物などの食物抗原の交差反応によるオーラル・アレルギー・シンドローム (OAS) の存在が認識され、臨床レベルでその発症に関する情報交換が行われました。ハウスダストマイトとの交差反応が疑われる食物中の貯蔵ダニの関与も示唆されていました。

④食物アレルギーの位置づけ・定義

アトピー性皮膚炎とフードアレルギーのワークショップ中、食物アレルギーの定義が揺れています。アトピー性皮膚炎のうち、食物成分が誘発するアレルギー反応を食物起因性 AD (Food Induced Atopic Dermatitis：FIAD) と定義すべきとする論調と、対処療法が異なるので従来のように別々に定義すべきとする論調とに分かれて議論されていました。

⑤健康な犬猫でも IgE 陽性反応を示す

複数の講演の中でいわゆるアレルギー・テスト (皮内テストおよび IgE テスト) の位置づけが確認されました。皮膚症状の程度の指標となる CADESI と各テストには相関がなく、臨床症状のない健康な犬猫でも IgE 陽性反応を示すことが複数の発表で明確にされています。

⑥アトピー性皮膚炎の治療のためには、感作抗原の同定をすべき

Dr.Thierry Olivry：論争中の犬アレルギー最新情報の講演中、系統的な診断アプローチをした上で、外部寄生虫など痒みを示す皮膚疾患を除外診断し、獣医師が AD の診断をしたならば、感作抗原の特定のために皮内テストもしくは IgE テストを実施すべきであり、季節性のない皮膚症状を呈した場合は、適切な除去食により IgE が関与したフードアレルギーの可能性を探るべきであることが強調されていました。



詳細情報をご要望の際は、TOPICS 番号を明記の上、下記メールアドレスまでご連絡ください。添付ファイルにて資料をお届けします。簡単な感想なども付記いただければ幸いです。(送信先アドレス：sljsupport@slj.co.jp)